
夏の僕ら

村松大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の僕ら

【Nコード】

N6769H

【作者名】

村松大

【あらすじ】

高校二年の夏の始め。雄介のクラスに転校生がやってきた。長い黒髪の似合う彼女は、雄介の過去に関わりがあるかもしれない女の子だった。

1. 転校生

「転校生を紹介します」

担任の谷口のいつもとは違う一声で、雄介の朝の眠気が綺麗に吹き飛んだ。

教室は一瞬静まり返り、すぐにざわめきだった。がらがらとドアを開けて入ってきた転校生は、さらっとした髪を背中の中くらいまで伸ばしたかわいい女の子だった。

「秋野綾香と言います。これからよろしくお願いします」

短い自己紹介のあと、転校生はぺこりと頭をさげた。

雄介の席は右はじの一番後ろで、その隣には誰も座っていない。もしかしたらと思っていたら、案の定谷口の口からその席が転校生の席だと言い渡された。席に着いた彼女は、両隣と正面の生徒によろしくねと挨拶をする。このぶんなら、学校に馴染むのは早いだろうなと雄介は思った。だがそれよりも雄介が気になったのは、おそらく気のせいではなく、秋野綾香が自分のことを意識していることだった。その理由は最初の休み時間にわかった。

「……あの」

遠慮がちに声をかけられ、雄介は机の上を片付ける手を止めて振り向いた。

「ん、なに？」

「あの、もしかして村田正樹君ですか？」

「……いや、俺の名前は佐々木雄介だけど」

「そうですか。ごめんなさい、昔の知り合いに似ていたからつい」綾香は心なしか残念そうな表情を浮かべつつ、それでも不思議そうに雄介の顔を見つめていた。それだけ似ていたのだろう。綾香が雄介を気にしていたのもそういうことかと納得がいった。しかし、今度は別のことが気になってくる。

「村田正樹って誰？」

「小学校の時の友達で、仲が良かった子なの。……実は初恋もその子なんだけど、五年生の時に私が引越してしまっただけで以来会ってなくて。それで、なんとなく面影があったから、もしかしたら彼かなって思ってた」

ほんのりと顔を赤くして秋野は答えた。言っていて恥ずかしくなってしまうのだろう。

「そうなんだ。秋野さん転校が多いんだね」

「うん、父の都合だから仕方ないんだけど、仲のいい友達と離れ離れになるのはすごく残念」

「その気持ちはわかるよ。俺も高校にあがるときにこっちに引越してきたんだけど、中学の時は静岡にいたんだ。引越すときは少し寂しかった」

そう言って、雄介は一年と三か月前のことを思い出す。出発の日には、クラスメートや三年の時の担任が見送りに来てくれた。お別れではあったけど、とても嬉しかったことを今でも覚えている。

「ところでさ、秋野さんが五年生まで通ってた小学校って東京の学校じゃないの？」

「え？ うん、そうだよ」

「……やっぱり」

「ねえ、どうしてわかったの」

「いや、秋野さん都会の人っぽいからなんとなく」

雄介はそう答えた時、チャイムが鳴った。綾香はもっと続きを話したがるそぶりをみせたが、雄介が次の授業の準備を始めるとそれにならって教科書を探しはじめた。

授業が始まり、静かな教室の中で教師の声と黒板を叩くチョークの音だけが聞こえてくる。雄介がちらりと隣を見ると、綾香は熱心に黒板を写していた。彼女の顔を眺めながら雄介は思った。こんな偶然ってあるんだろうか、もしかしたら先生が仕組んだのだろうか

と。その時、何かが飛んできてこつんと雄介の頭にあたった。床を見るとチョークがコロコロと転がっていた。

「こら佐々木、転校生が美人だからって見とれるんじゃない」

教室にどっと笑いが溢れる。

綾香もやたらと嬉しそうに笑っているのを見て、雄介はポリポリと頭をかいた。

2. 親戚の子

綾香が引越してきた日の夜、雄介はアルバムを取り出して部屋で一人眺めていた。

アルバムは両親の若いころの写真から始まり、仲の良さそうな二人の写真にいつからか雄介が含まれるようになり、あとは雄介一色だった。

静岡の山で育った雄介はいつも外で健康そうに遊んでいた。周りの自然にあわせて、川で遊んだり、細い竹で空気鉄砲を作ったり、虫かごをアミを持って森の中にくり出したり。

ふと、アルバムをめくる手がとまった。そこには雄介と、もう一人の少年が一緒に写っていた。親戚で、いつも夏休みに家族と遊びに来ていた男の子だ。都会の子だからか、雄介よりも色白で少し控え目そうな印象をうけるが、にっこりと明るい笑顔でカメラに向かってしている。その子はいつも一週間以上滞在し、帰る頃には雄介と同じくらい日焼けしてた。

今はやめてしまったが、以前まめに日記をつけていた雄介は、その頃の日記を探して読んでみた。そこには、親戚の子が来ている間は海に行ったりおいしい料理を食べに行ったりと嬉しい出来事が多いから夏休みでも特にその期間は楽しみだ、来年も風邪をひいてでも遊びに来てほしいと、ずいぶん現金なことが書いてあった。しかも、翌年も、さらにその翌年も同じようなことを書いており、なんとなく成長していない気がして、読むのが恥ずかしくなった。

その子の写真は、中学二年の夏で終わっていた。日記もその頃から書かれていない。

日記を読みながら昔の記憶を思い起こそうとしているうちに、雄介はいつの間にか眠ってしまった。

夢の中で、子供の雄介が山を下る車道を歩いていた。山の輪郭に

そつて、うねうねとカーブを描く道路はまるで蛇のようだった。少しすると雨雲が空を覆い始め、雨が降ってきた。しかし雄介は一人でどこそこ歩き続ける。不思議と車は一台も通らなかった。

あるところで、ひととき大きいカーブにさしかかった。そこで雄介は足をとめた。足元から長い長いスリップ跡がガードレールの辺りまで伸びていて、そのガードレールはひどく歪んでいた。それは大変な事故だったのだろう。

雄介は、いつのまにか手にしていた花束を三つ、ガードレールの下においた。

小粒の雨が、立ちつくす雄介の体をずっと打ちつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6769h/>

夏の僕ら

2010年12月14日19時26分発行